

知的障害者と母親の「親離れ・子離れ」問題

- 知的障害者の地域生活継続支援における課題として -

神戸女子大学 植戸 貴子 (2380)

キーワード：知的障害者 親離れ・子離れ 地域生活継続支援

1. 研究目的

今日の障害者福祉では、地域生活移行が重要な課題の一つとなっており、施設を出てグループホームなどで生活する知的障害者が増えている。一方で、親と共に地域で暮らしてきた知的障害者に目を向けると、親が高齢などのためにケアが難しくなっても適切にサービスを利用せず、「親が抱え込んでいる」ケースが多い。結果として、食事がきちんと摂れていない、清潔が保たれていない、外出できずに閉じこもっているなど、本人のQOLの低下を招いている。あるいは、ぎりぎりまでサービスを利用せず、突然、親が倒れたために、施設への緊急ショートステイを経て正式入所を余儀なくされる人もいる。このことから、「親によるケアが難しくなった後も、地域で適切な支援を受けながら安定した豊かな生活を続ける」という地域生活継続への支援が課題であると言える。そして、この地域生活継続を実現するためには「親によるケアから親以外の支援者によるケアへのスムーズな移行」が必要となるが、現実には、親とりわけ母親による「抱え込み」が、このバトンタッチを難しくしていると言われる。そこで、本研究では、母親による「抱え込み」に見られる、知的障害者と母親の「親離れ・子離れ」問題に焦点を当て、その背景にある要因を整理・分析し、地域生活継続支援における「親離れ・子離れ」の促進の方策を探る。

2. 研究の視点および方法

主として知的障害者の家族介護や地域生活支援などをテーマとした文献の中から、知的障害者と家族、特に母親との関係性について論じている箇所を取り上げる。そして、知的障害者と母親の間の「親離れ・子離れ」問題がどのような視点から捉えられ、背景にどのような要因があると考えられているかを分析する。

3. 倫理的配慮

本研究では、先行研究の整理・分析を行うため、先行研究の引用等に際しては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守する。

4. 研究結果

(1) 社会福祉学の立場からの議論

) 制度論的視点：母性・家族扶養という社会的規範を前提とした補完的な公的サービス
社会福祉あるいはソーシャルワーク実践の分野において知的障害者の家族介護や地域生活支援を論じた文献では、知的障害者のケアが母親の手に委ねられており、公的なサービ

スは母親による介護を補完するに止まっていることが指摘されている(鈴木・塩見:2005、曾根:2002など)。そしてその背景に、家族とりわけ母親が障害者の世話をするのが当然とする社会的規範があると分析している(井上・塩見:2005、岡部:2004、西村:2007)。母親は一人で介護を担うことを周囲から期待されると同時に、わが子の介護を委ねるサービスが不足しているために、わが子のケアを抱え込んでしまう。結果的に、本人と母親の関係が密着したものとなり、本人が成人した後も、親離れ・子離れができないとされる。

) 実践論的視点: 知的障害の特性からくるパターンリズム

同じく知的障害者福祉分野の文献には、障害ゆえに親が過度に保護的になり(岸田:2006)、意思伝達能力や判断能力に欠けるといふ知的障害の特性が、本人と母親との関係を保護的なものにしていくという主張も見られる(上田:2002)。そして中野(2009)は、本人を守ろうとする母親が主体となり、「本人の影が薄い」と指摘している。身体障害などの場合と異なり、知的障害のある本人と母親の間には、より密着した関係が生まれ、親離れ・子離れをより難しくしているということになる。

(2) 比較文化論・社会学の立場からの議論

) 日本の家族関係論: 子どもの独立という規範の欠如

知的障害者と母親との密着関係の根底には、日本社会における家族関係の特性があるというのが、この立場の議論である。欧米社会と違って、わが国では、子どもはいずれ親から独立すべきであるという独立意識が乏しいために子離れが困難になっており(武田:2001)、「ベタベタの関係が支配的になってしまう」(岡原:2005)と指摘されている。そもそも、親離れ・子離れが不十分な文化があり、子どもに知的障害があることによって、その問題がより顕著に現れてくるという解釈である。

) 社会学・障害学的視点: 障害者に対する社会的抑圧

社会学や障害学の文献においては、知的障害者と母親の密着関係の背景に、障害者に対して社会から向けられるネガティブな視線や抑圧があるという指摘が見られる。親は障害のあるわが子に対して愛他的であると同時に抑圧的でもあり(Shakespeare:2006)、社会の中で否定的な価値をもつ障害児を生んだという罪責感から、母親が子どもとの閉鎖的な空間を作ってしまう(岡原:1995)。障害が「あってはならない存在」とされる社会において、親はわが子を抱え込むことになり、時に社会的抑圧をわが子に対して転嫁してしまう(杉野:2007)というのが、障害学的視点から見た母子密着関係に対する分析である。

以上のように、知的障害者と母親の密着関係の背景要因は多面的に分析することができるが、実際には、すべての要因がさまざまに絡みあって、母子密着を生み出していると考えられる。したがって、知的障害者の地域生活継続支援において親離れ・子離れを促進していくためには、このような複雑な文脈を理解した上で、個々の母子関係への支援から、家族扶養や家族関係に対する関係者の意識の改革、公的サービスのあり方の見直し、障害観のパラダイム転換までを視野に入れた障害者ソーシャルワークが必要となる。